

**【サンプル版】**

**実録**

**52歳のオヤジが若い子を  
次から次へとセフレにしていった方法**

**Ver 1.0**

サンプル版のため伏せ字等読みにくい部分がありますがご了承下さい。

**By Daizo**

#### 著作権に関する表記

本商材は、著作権法で保護された著作物にあたります。本商材の取り扱いについては下記の点にご注意ください。

本商材の著作権は、執筆者である著作者にあります。

著作者の事前許可なく、本商材の一部または全部を無料・有料を問わず印刷物、電子ファイル、ビデオ、音声、ホームページなどのあらゆる手段により、複製、流用、転載、配布、公開、転売等することをすべて禁じます。

#### 使用許諾契約について

本契約は、本商材を購入した者(以下、甲とする)と著作者(以下、乙とする)との間で合意した契約です。本商材を受けとることにより、この契約は成立します。

#### 第一条 契約の目的

本契約は、本商材に含まれる情報を、本契約に基づき、甲が非独占的に使用する権利を承諾するものとする。

#### 第二条 第三者への公開の禁止

甲は本商材の一部または全部を、いかなる手段によっても第三者に公開・配布することはできない。

#### 第三条 契約解除

甲が本契約に違反した場合、乙はいつでもこの使用許諾契約を解除することができる。

#### 第四条 損害賠償

甲が本契約の第二条の規定に違反した場合、本契約の解除に関わらず、甲は乙に対し、違約金として、違反件数と違反行為時の販売価格を乗じた価格の10倍の金額を支払うものとする。

#### 第五条 免責事項

本商材はこれまでの経験をもとに作成したもので、確実性を保証するものではない。本商材の情報によっていかなる損害が生じた場合においても、乙は一切の責任を負うものではない。

## 【はじめに】

はじめまして。著者の Daizo です。

このたびは当サンプルをご購読いただき誠にありがとうございます。

この話はノンフィクションです。お気をつけてお読み下さい。

このノウハウを目の当たりにしたとき、当時まだ私は25歳そこそこの今で言うフリーターでした。もともとアルバイトのような感覚でお手伝いしていたのですが、その「オヤジ」は(仮名:大久保氏とさせていただきます)自身が形成している「XXXXXXXXXX」(本人がそう呼んでいる)を次から次へと呼び出し飲んではホテルへ連れて行くという行動が当時の私には大変衝撃的でありました。

以降、その全容を述べさせていただくとともに、皆様でも実践できるような形として事例を作っていければ幸いです。

ちなみに後半部分には私自身がアレンジして行ったバージョンがありますのでご参考にしていただければと思います。

## 第一部【大久保方式】

- ・ このノウハウのベースを学んでください。
- ・ そして、自身に置き換えアイデアを練ってみてください。

## 第二部【大久保方式(改)】

- ・ 具体的に私が実践した方法を確認してみてください。
- ・ 不明点・疑問点があればメモを取ってください。

## 第三部【実践マニュアル】

- ・ 読み進めながら更に自身の立場に置き換え考えてみましょう。
- ・ やってはいけないのが即行動です。しっかり戦略を立てた上で戦術(実践)に移りましょう。

## 第四部【あとがき】

- ・ 最後の注意事項です。頭の良い方ですと悪用する恐れがあります。法律を犯さぬようご注意を！
- ・ 不明点・疑問点があればメールをください。

## 第一部 【大久保方式】

1、大久保氏との出会い

2、大久保氏の印象

3、大久保氏との会話

4、大久保

5、で( サンプル版のため見れません)

6、後日、大久保氏に聞きに行きました

7、羽田さんとの出来事(前編)( サンプル版のため見れません)

8、羽田さんとの出来事(後編)( サンプル版のため見れません)

## 【大久保氏との出会い】

よくつるんでいた友人の森田さん(仮名:一応先輩のため敬称付き)とは「セッ ス」したい「セッ ス」したいとそんなことばかり言っているどうしようもない2人でした。

ある時、森田さんのちょっとしたツテで大久保さんを紹介してもらうことになりました。

そうなんです。私と森田さんは

その流れで

である大久保氏と会うことになったのです。



## 【大久保氏との会話】

はじめて大久保氏に会ったときの会話です。

私 「はじめまして、こんにちは」

森田 「どうも、こんにちは」

大久保 「よう、若いし元気があっていいなー。それでどうした？女か？」

森田 「違いますよ、僕たち

もらおうと思って」

大久保 「なんだ、女じゃねーのか。何、ったってたいしたことしてねーぞ俺は」

私 「いや、もらいたかつ

たんですよ。大久保さん

聞いたもので」

大久保 「ってほどのものじゃねーんだよ。俺の

は」

私・森田 「えっ??」

大久保 「女ならいくらでもやるぞ」

森田 「マジっすか？」

私 「マジですか？」

大久保 「何だよお前ら情けねーなー」

とまあこんな感じの会話でした。

いったいなぜ大久保氏が女をたくさん抱えることができ、またその女をどこから調達してくるのが全くわかりませんでした。

「いくらでもやるぞ」という大久保氏の言葉に嘘偽りがなく、はじめて会ったその日の夕方には早速飲み会が行われ、(大久保氏は女に電話をかけ「今から飲むからすぐに来い」と呼び出し)大久保氏、私、森田さん、と大久保氏の友人(この人もなんとなく [REDACTED])。同じく大久保さんが電話で呼び出す)の4人で近くの居酒屋(たしか養老の瀧だったような。チェーン店でした。)に飲みに行きました。飲んでいるとほどなくして次から次へと女性([REDACTED] [REDACTED])が到着してきました。

[REDACTED]の人はそこまできれいではないんだけども不細工でもないといったような感じでした。ただ、フェロモンはむんむんに出ていたような気がします。(ただ私がやりたくて疼いていたからそう見えたのかもしれませんが

が)

その後は大久保氏の命令でお持ち帰りという状況になり、おいしい思いをさせていただきました。

聞くとところによると大久保氏はこのように夜な夜な飲み会をやっているようで、「それじゃあ太るわ」ということにも妙に納得したことを覚えています。

かれこれ一ヶ月ほどした頃、再訪する機会がありました。( [REDACTED] から来いと呼ばれたのです)

約束より少し時間が早くついたので連絡を入れたところ、じゃあ [REDACTED] [REDACTED] に向かいました。

そのときに、この大久保氏がどのようにしてセフレを作っていたのかをこの目で見ることが出来たのです。

[REDACTED] に着くと、大久保氏は女性と話していました。

【大久保 ██████████】

私 「こんにちは。ご無沙汰です」

大久保 「おう、来客中だからちょっと待っててくれ！」

私 「わかりました。そこのソファ座っていいですか？」

大久保 「いいよ。すぐ終わるから」

私 「じゃあすみません、待ってます。」

大久保氏が話している相手は見た感じ20歳位の女性でした。当然私の頭  
の中では ██████████ だったので ██████████  
██████████ かなという感じで捉えていました。

大久保氏との話しも至って普通に真面目な話をしていましたし、また、前回の飲み会のようなフェロモンも無く(胸がでかかったのは覚えてますが)、普通の感じのまあ「お嬢様」的なキャラでした。それが後々あんなことになるうとは、  
このときは全く予想していませんでした。

しばらくすると大久保氏が私を呼びました。

大久保 「おう、[REDACTED]」

私 「はい」

大久保 「こっちは羽田君(仮名:その女性のこと)。[REDACTED]  
[REDACTED]？」

私 「えっ、[REDACTED]です。」

(このオヤジなんてこと言ってんだ！)

大久保 「彼女、[REDACTED]」

私 「えっ。あ、はい」

大久保 「じゃあ良かったな。羽田君このあと[REDACTED]  
[REDACTED]」

羽田 「あ、大丈夫です」

大久保 「じゃあちょっと待っててくれ。支度するから」

後で気づきましたが「ダシ」に使われたんですね。わ・た・し

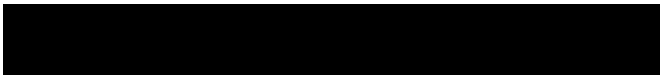
そして、その席で大久保氏の類稀なる「セフレ増産法」が明らかとなるのです。

5番項の「[REDACTED]で」はこのノウハウを明らかにしているため申し訳  
ありませんがお見せすることができません。

## 【後日、大久保氏に聞きに行きました】

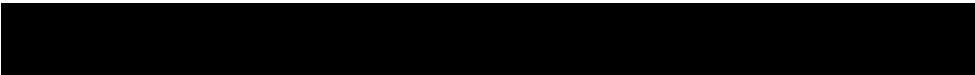
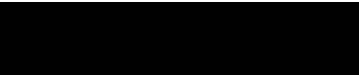
私 「こんにちは、今日はこの前の続きが聞きたくて来ました。」

大久保 「おう、何の話だっけ」

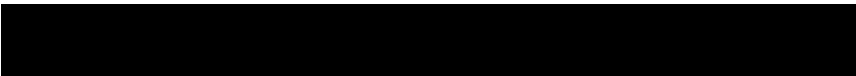
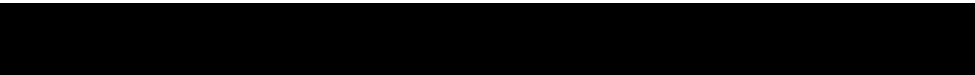
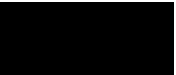
私 「方法ですよ」

大久保 「そっかそっか。なんか途中で終わっちゃったんだよな。で、どこまで話したっけ？」




私 「断った女の子を口説いていくところですよ」

大久保 「あーあー。結構断るのも多いんだけど、とにかくそんな女には  
  
。」

私 「そんなんで納得するんですか？」

大久保 「あとは  
  
。これでだいたい決まるな。」

私 「そんな簡単なもんなんですか？」

大久保 「簡単だよ。が一番なんだ。とにかく  
女は履いて捨てるほどいる。いつもやっている飲み会で

すら [REDACTED] だから。君の持って帰っ

た女だって [REDACTED]

[REDACTED]。という具合になるんだよ。」

私 「たしかに、 [REDACTED]。フェ が好きなんだよって言っ  
たらずっとやってくれたからなー。」

大久保 「そうだよ、そういうことなんだよ。 [REDACTED] は何で  
[REDACTED] もするんだから。でも [REDACTED] 結構気を遣ってるんだ  
ぜ。」

私 「どんなところでですか？」

大久保 「色々 [REDACTED]  
[REDACTED] ではしょうがないだ  
ろ。まあ、 [REDACTED] だからと言  
って結局俺がいたいちゃうんだけどな(笑)」

私 「 [REDACTED] 人かわいそうですね」

大久保 「いいんだよ、 [REDACTED] やってるんだから。事  
前にお前 [REDACTED] みたいな。たまに飲み代まで  
払わせたりもして。」

私 「ちょっとかわいそうですね」

大久保 「まあ、君も同じようにやってみたら？」

私 「そうですね」

この時点では「こんなうまい手がある」ということに対して特に真面目に取り組もうとしなかったのです。なんとなく [REDACTED] 思っていたんでしょうね。また、その時期はおそらく [REDACTED] にのめり込んでいて、面倒くさかったからだとは思いますが。

しかし、後々に悪友の森田さんとこの方法を使いました。どれだけ派手にやりまくったかをご紹介しますと思います。

その前に、羽田さんとの出来事をお話しておきましょうか？

皆様のヒントになることは間違いありませんので。

【サンプルここまで、以下本編へと続く・・・】

「実録 次から次へとセフレを作った方法」

## 【サンプル付録】

おまけデス…

羽田さんとの出来事。一部抜粋してみました。

私が着くと羽田さんはもう着いていました。けっこうびっくり、なぜなら「胸元 ぱっちり化粧ぱっちりアピール」でフェロモンが出ていたのです。この前会った時にはお嬢様風の格好だったのでちょっと今回はドキドキしました。(すみません、おっぱい星人なもので)そしていけないことに [REDACTED] [REDACTED] しまったのです。

私 「ごめん、待った？」

羽田 「いえ、ちょっと前に着いたところです。」

私 「じゃあまずは [REDACTED]

[REDACTED]

羽田 「わかりました」

私 「今日はとてもかわいいね、普段はそういう格好なの？」

羽田 「そうですね、あんま着ないかも。どうかな？」

私 「 [REDACTED]

[REDACTED] 何かッブ？」

羽田 「E カップです。」

私 「でかいね～。羽田さん彼氏はいるの？」

羽田 「いますよ」

私 「じゃあ彼氏が羨ましいな～」

羽田 「そうですかねー」

と他愛も無い会話をしながらファミレスへ行き、

(今考えると全くおかしい話で、

おまけもここまでです！

続き及び全容が気になる【あなた】

本編にてお待ちしております。

「実録 次から次へとセフレができた方法」